

## 山科本願寺跡の庭園遺構

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

柏田 有香

### 1. はじめに

京都を代表する室町時代の遺跡の一つ山科本願寺跡では、これまでに28回の発掘調査と多数の試掘・立会調査が実施され、いくつかの庭園遺構が見つかっています。今回はこれらの遺構を紹介し、絵図や文献資料、同時代の遺跡などを参考に、その性格を考えてみたいと思います。

### 2. 山科本願寺について

文明10年（1478）、本願寺八世蓮如は、現在の山科区西野の地に山科本願寺の造営を開始しました。寛正6年（1465）に東山の大谷本願寺を追われて以後、各地を転々として布教活動を行っていた蓮如にとって本願寺の再興は悲願でした。山科盆地の中央やや西寄り、旧東海道と東海道から分岐する奈良街道や渋谷街道が傍を通る交通の要衝に位置した山科本願寺は（図1）、のちに「寺中広大無辺、莊嚴ただ仏国のごとし」（『二水記』）と記されるほど繁栄しました。

山科本願寺の寺域は土塁と濠で囲まれ、阿弥陀堂、御影堂をはじめとした主要堂舎の置かれた「御本寺」、有力末寺の坊舎が置かれた「内寺内」、門徒の居住区などがある「外寺内」の3つの郭で構成され、壮大な規模を誇りました（図2）。阿弥陀堂と御影堂を並立させ、前庭を広くとる配置は山科本願寺が祖型とされ（櫻井1997）、現代の本願寺系各寺院に継承されています。また、延徳元年（1489）には、山科本願寺から東へ約1kmの場所に蓮如の隠居所である山科本願寺南殿が造営されました。蓮如は明応8年（1499）に南殿で没しています。

山科本願寺は、寺内町の経済的発展にも支えられ、一時は將軍家や有力武家をしのぐ繁栄ぶりでしたが、蓮如の没後、本願寺十世証如の代の天文元年（1532）に管領細川晴元率いる軍勢によって攻撃され焼け落ち、その後本願寺は大坂へ移転することとなりました。

山科本願寺跡では、多数の調査が実施されていますが、2011年度からは「御本寺」内で継続的に確認調査が行われ、主要堂舎の配置をある程度復元することが可能となりました。また、寺を囲繞する土塁についても構造や構築時期についての知見を得ることができました。それらの成果から、2016年には寺域中心部が国史跡に追加指定され、2021年には史跡公園がオープンしました。また2024年には、江戸時代以降、山科本願寺の遺構を守り伝えてきた奥田家の屋敷地なども国史跡に追加指定されました。

### 3. 山科本願寺跡の庭園遺構

蓮如の述作である『御文』には、山科本願寺の造営をはじめてまもない文明十一年（1479）正月十六日に「（前略）林ノ中ニアルヨキ木立ノ松ヲホリテ庭ニウヘ、又地形ノ高下ヲ引ナホシナントシテ（後略）」とあり、蓮如が当初から作庭を重要視していたことがわかります。また、醍醐寺理性院の僧巖助の日記『永正十七年記』には、永正十七年（1520）四月十二日条に「山科本願寺一見。庭・座敷之躰、驚目者也。下妻大輔・興正寺以下一覽。美麗超過云々。」と記されており、山科本願寺の庭と座敷が見るもの皆が驚くほど美麗超過であったことがわかります。

発掘調査では、「御本寺」西部で実施された13・14・17・18次調査で庭園に関連すると考えられる遺構が見つかっています（図3）。13次調査では、土塁の際で泉状遺構や石組溝からなる庭園遺構が見つかりました（写真1・2）。14次調査では、池や石敷きからなる庭園遺構や礎石列が見つかりました（写真3）。これら遺構埋土や遺構面を覆う焼土層からは多量の輸入陶磁器や堆黒・蒔絵など的高级漆芸品が出土しました（写真4）。このことから、ここは本願寺の饗応施設である「御亭」の一角である可能性が高いと考えています。「御亭」は、現在の西本願寺飛雲閣に繋がる本願寺にとっては欠かすことのできない重要な施設であったとされています。17次調査では、建物と建物を結ぶ通路状遺構や石組溝を配した坪庭（写真5）が見つかりました。18次調査では石組井戸や石風呂（写真6）、塀などが見つかりました。

以上の庭園に関係する遺構群は約200m四方の範囲におさまり、『都名所図会』に描かれた西本願寺（図4）の建物配置や蓮如の記した『御文』に記された施設との対比から、宗主一族の居住施設や寺の実務施設、饗応施設の一部と考えられ、一般門徒には解放されない私的空間にあった庭園と考えられます。

### 4. 風呂と庭

上述のように、18次調査では庭園遺構群に近接する場所で、石風呂が見つかっています。風呂と庭は一見、関係性が薄いように見えるかもしれませんが、寺院にとって風呂は心身を洗い清める修行の場であり、禅宗寺院では浴室は七堂伽藍の一つとして重要な意味を持ちます。一方、室町時代以降、風呂は別の重要な役割を果たすようになります。豊富な水や燃料を必要とする風呂の使用は贅沢な行為であり、それと茶の湯が結び付き、入浴後に一服することが「淋汗茶湯」と呼ばれ、贅沢な遊びとして上流階層で流行しました。

西本願寺の名勝滴翠園の中に建つ飛雲閣は、山科本願寺の「御亭」が発達したものともいわれています。飛雲閣の北側には、渡り廊で繋がった黄鶴台という建物がありますが、黄鶴台の正式名称は本願寺浴室であり、まさしくもてなしの空間に建てられた風呂なのです（図8・9）。山科本願寺の遺構配置をみると、石風呂と「御亭」と考えられる空間との間に通路状遺構が見つかっており、風呂と庭は切り離せないものであったと考えられます。また、織田信長が京都での御座所とするため築き、その後、誠仁親王に献上した二条御新造の調査でも、浴室遺構が見つかっています（写真8）。この遺構も、屋敷地の南端に位置し、敷地北側にあったとされる主殿とは独立した施設であったと考えられます（図10）。浴室の北側では洲浜や景石を備えた池が見つかっている（写真7）ことから、日常的に使用するものではなく、西本願寺黄鶴台と同様に庭を望むもてなしの空間に建てられた風呂であったと考えられます。

山科本願寺の風呂については、蓮如の子の実悟が記した『本願寺作法之次第』に利用者や入浴方法が具体的に記されており、「御住持（宗主）」「御内衆（家臣）」「一家衆（宗主一族）」のほか「五山などの長老」など、客人の使用もあったことがわかります。

### 5. おわりに

山科本願寺が栄えた時代は、いわゆる戦国時代であり、その中で本願寺は一宗派でありながら財力や門徒の勢力から、事実上、戦国大名と同等の扱いを受けていたとされます。幕府や諸大名、他宗派との文化的交流あるいは政治活動の場として壮麗な庭園をそなえた迎賓施設は、その威信を示すためにも重要であったと考えられます。山科本願寺全体の面積からすれば発掘調査が行われた範囲はわずかですが、その中で複数の庭園遺構が見つかっていることや文献資料の記述、その後の本願寺系寺院における庭園の位置づけなどから、本願寺が庭園を重要視したことがよくわかるのではないのでしょうか。

山科本願寺跡の遺構群

山科本願寺跡の遺構群

山科本願寺跡の遺構群

山科本願寺跡の遺構群

山科本願寺跡の遺構群

山科本願寺跡の遺構群

山科本願寺跡の遺構群

山科本願寺跡の遺構群

山科本願寺跡の遺構群

山科本願寺跡の遺構群

山科本願寺跡の遺構群

山科本願寺跡の遺構群

山科本願寺跡の遺構群

山科本願寺跡の遺構群

山科本願寺跡の遺構群

山科本願寺跡の遺構群

## 資料1

<sup>[1]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[2]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[3]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[4]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[5]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[6]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[7]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[8]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[9]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[10]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[11]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[12]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[13]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[14]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[15]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[16]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[17]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[18]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[19]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[20]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[21]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[22]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[23]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[24]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[25]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[26]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[27]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[28]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[29]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[30]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[31]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[32]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[33]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[34]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[35]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[36]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[37]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[38]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[39]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[40]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[41]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[42]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[43]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[44]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[45]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[46]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[47]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[48]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[49]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[50]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[51]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[52]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[53]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[54]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[55]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[56]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[57]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[58]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[59]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[60]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[61]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[62]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[63]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[64]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[65]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[66]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[67]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[68]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[69]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[70]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[71]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[72]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[73]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[74]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[75]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[76]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[77]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[78]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[79]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[80]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[81]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[82]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[83]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[84]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[85]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[86]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[87]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[88]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[89]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[90]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[91]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[92]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[93]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[94]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[95]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[96]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[97]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[98]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[99]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

<sup>[100]</sup> 山科本願寺跡の遺構群

表1 山科本願寺関係略年表

長祿元年 (1457)		蓮如、本願寺八世宗主となる。
文明10年 (1478)	1月	蓮如、野村柴の庵に居す。馬屋新造。(山科本願寺の造営始まる。)
11年 (1479)	1月	<b>整地と作庭を始める。</b>
	3月	向所を新造。
	4月	堺の古坊を移し、寝殿をつくりはじめる。
12年 (1480)	12月	御影堂建設用材柱50余本など、山科につく。
	3月	御影堂、棟上の祝。
	12月	吉野で阿弥陀堂用大柱20余本をあつらえる。
13年 (1481)	4月	阿弥陀堂棟上。
15年 (1483)	8月	阿弥陀堂瓦葺きおわる。
延徳元年 (1489)		山科南殿を造営する。
明応6年 (1497)		大坂石山坊舎造営。
8年 (1499)	2月20日	蓮如大坂から山科南殿に戻る。
	3月25日	蓮如没す、85歳。
永正17年 (1520)		<b>本願寺の庭や座敷が美麗超過と評される。</b>
大永5年 (1525)		九世宗主実如没す。証如、十世宗主となる。
天文元年 (1532)	8月24日	法華宗・延暦寺・六角氏の攻撃により焼亡。山科本願寺陥落。
2年		証如、石山坊舎を本寺と定める。本願寺大坂へ移転。

(西川幸治「都市史の中の中世寺院」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年より一部抜粋、改変)

表2 本願寺参考系図(安藤弥氏作成)

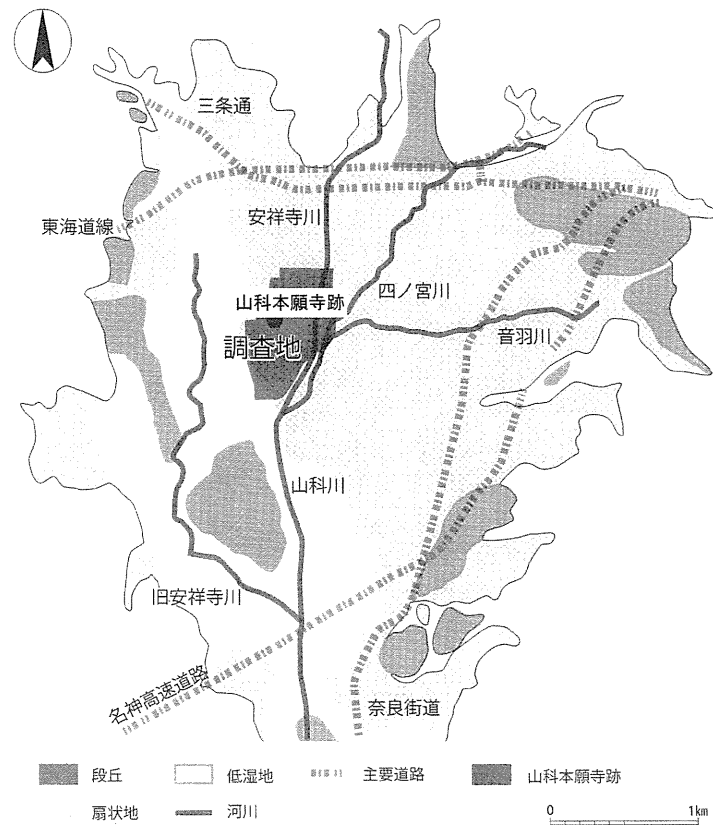
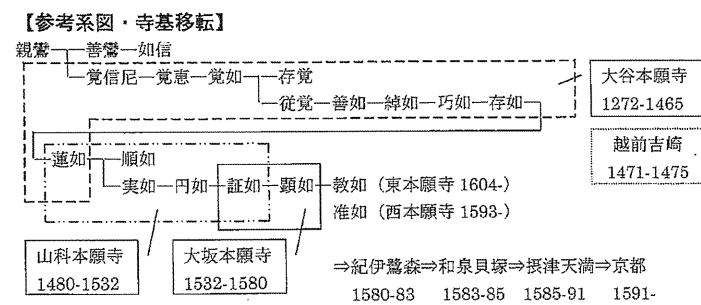


図1 山科盆地地形および山科本願寺の位置(1:50,000)  
(奥井2022の図を一部改変)

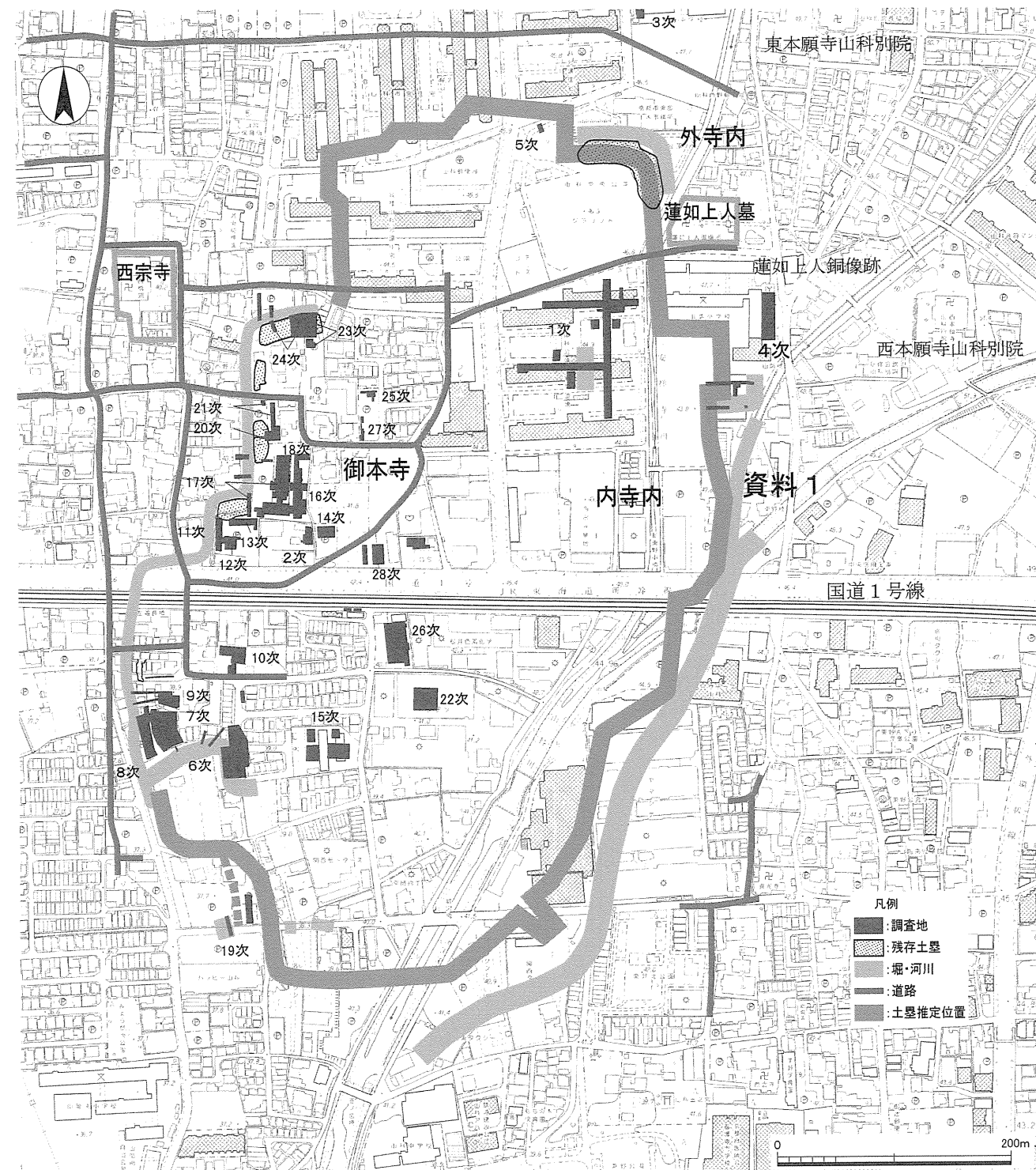


図2 山科本願寺跡主要調査位置図(1:5,000)  
(京都市発行の都市計画基本図「山科」を参考にし、作成した)



写真1 13次調査 泉状遺構(東から)

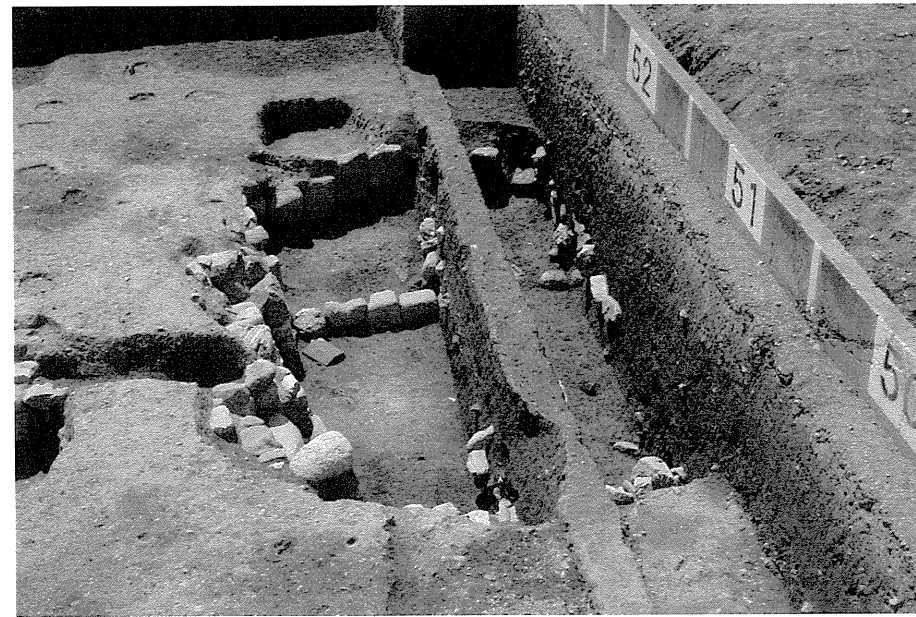


写真6 18次調査 石風呂全景(北から)

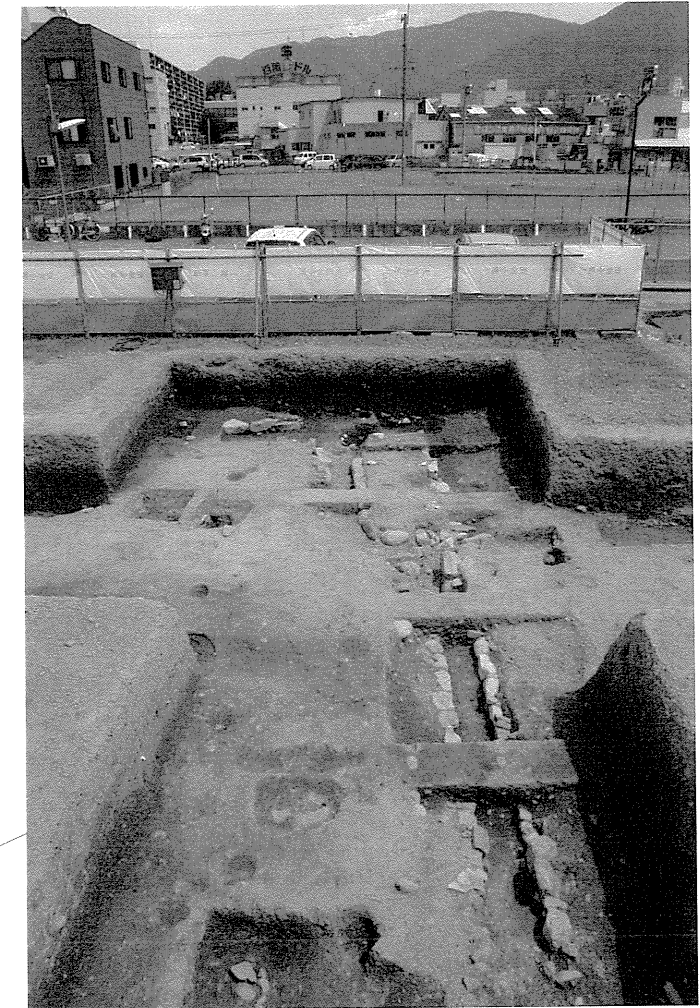


写真5 17次調査 石組溝群全景(西から)

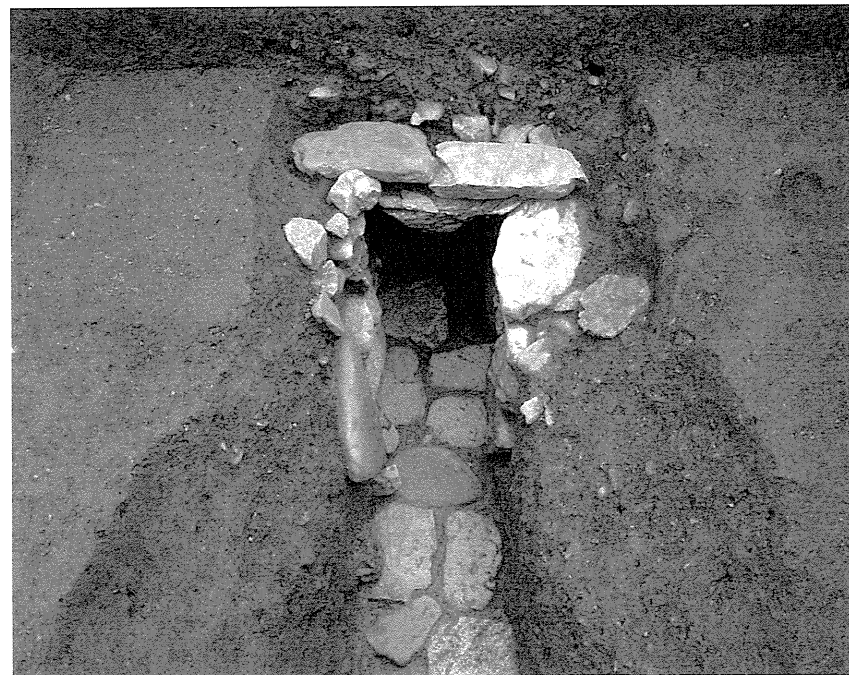
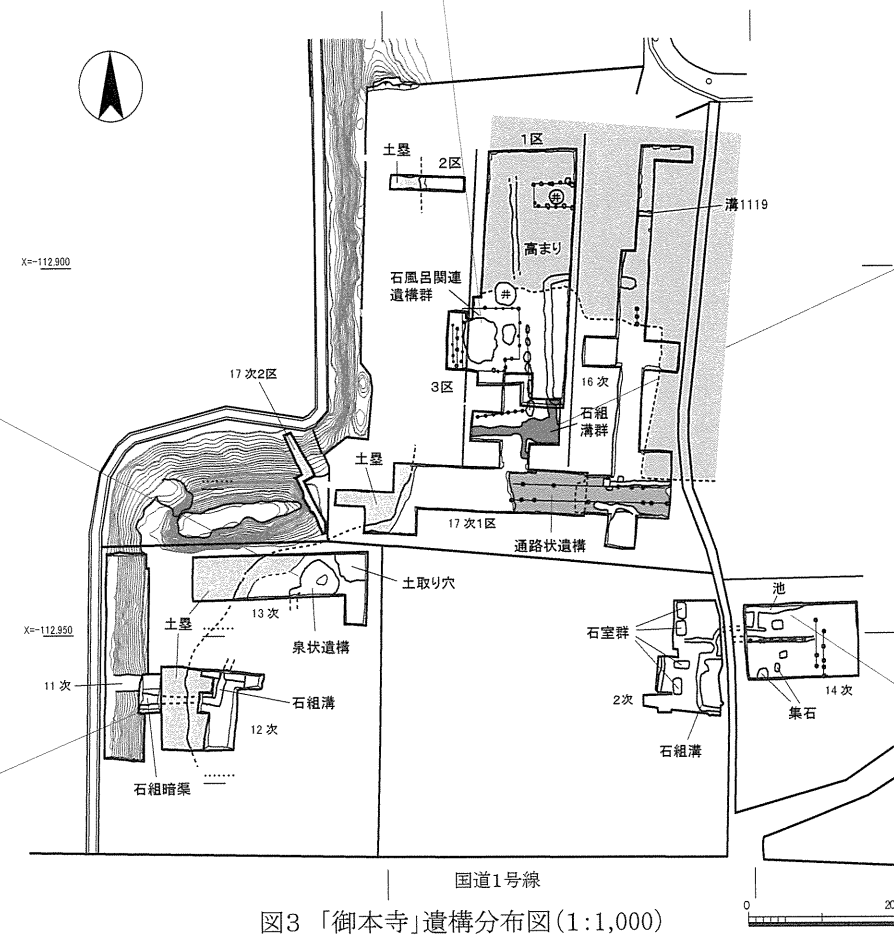


写真2 12次調査 石組暗渠(西から)

写真4 14次調査出土  
輸入陶磁器類

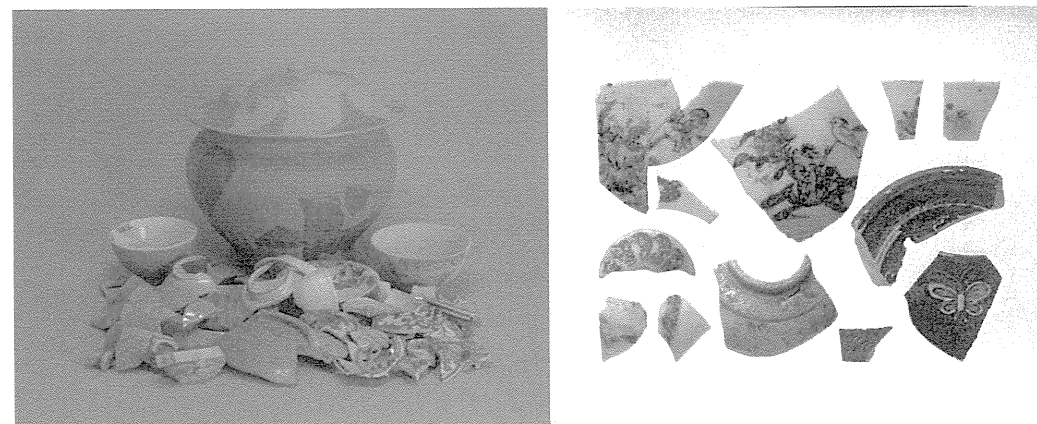


写真3 14次調査 石敷き池状遺構(東南東から)

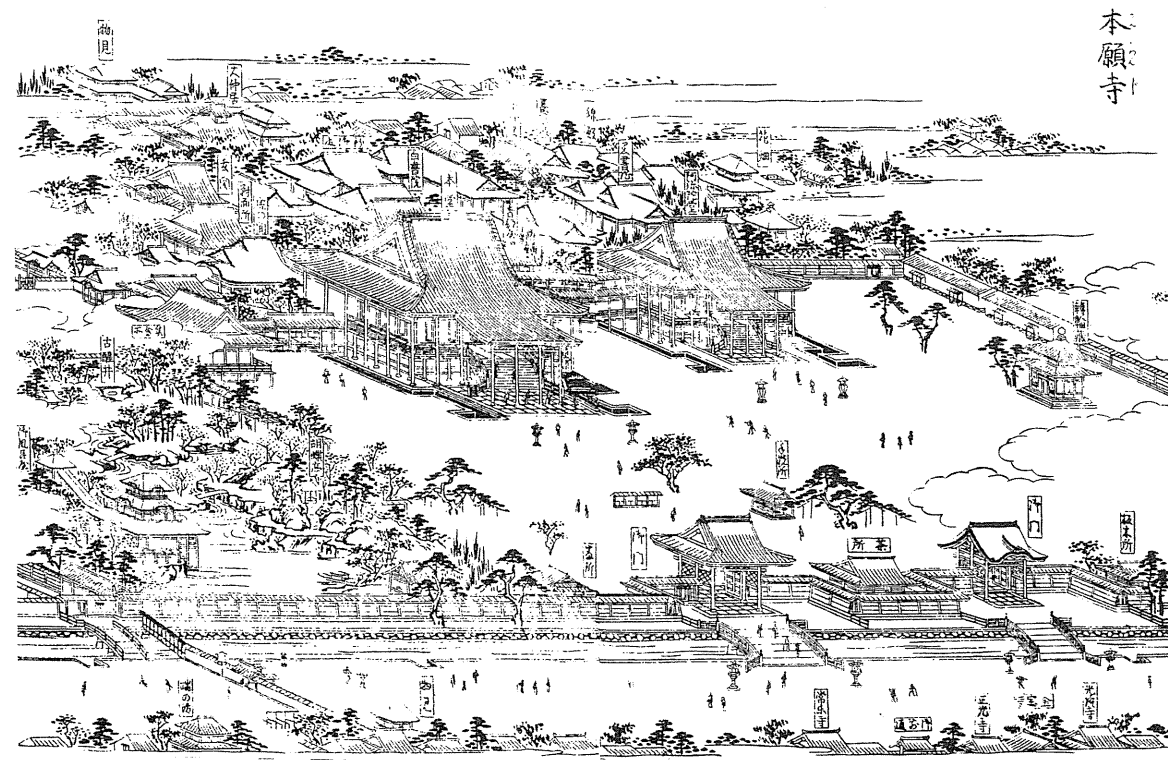


図4 「本願寺」『都名所図会』『新修京都叢書』第6巻 臨川書店 1967より転載

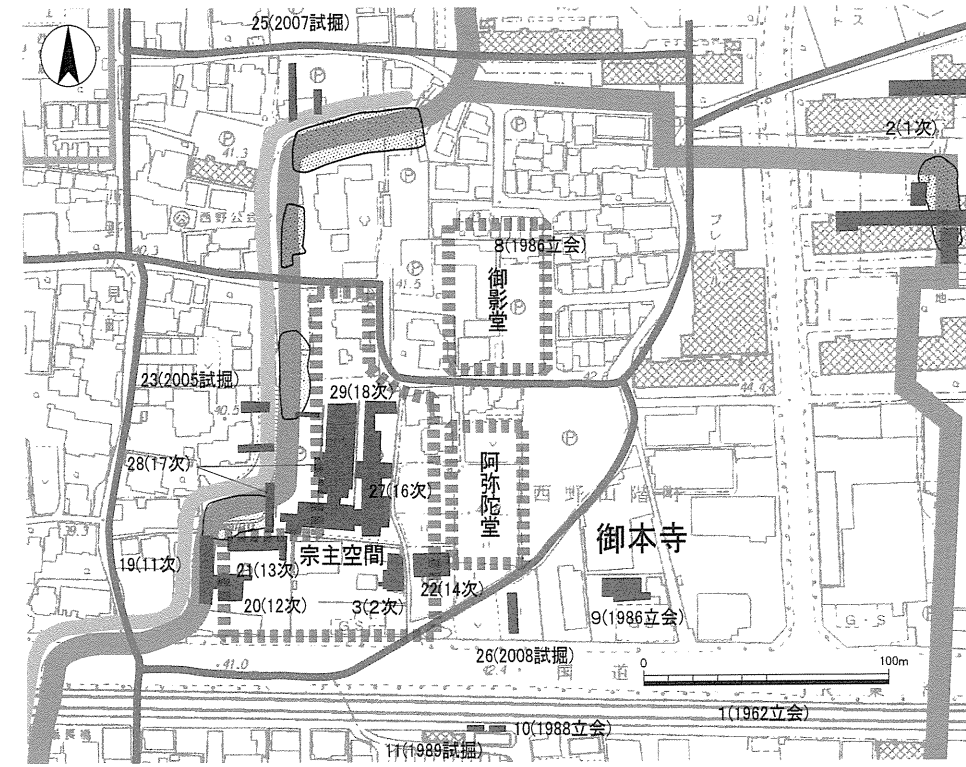


図6 「御本寺」中枢施設推定図(1:3,000)  
(馬瀬2013より転載)

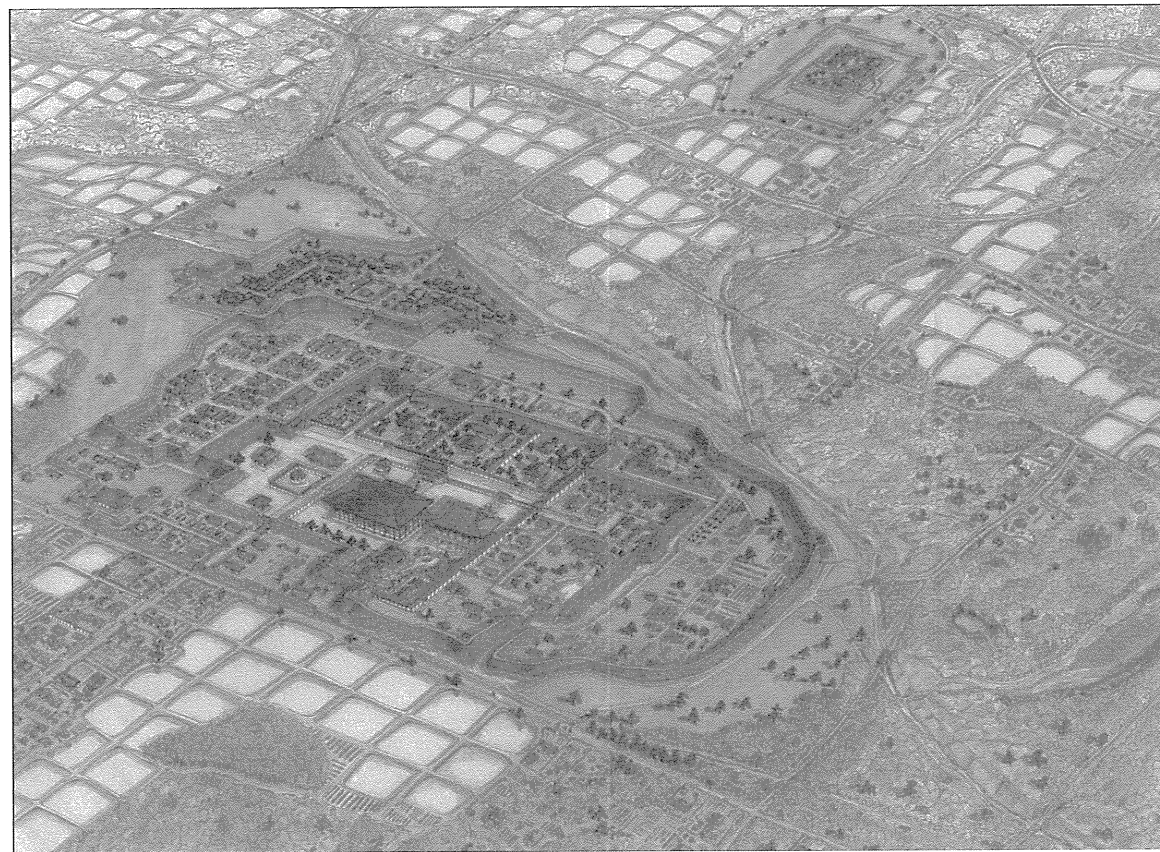


図5 山科本願寺イメージ図 梶川敏夫作

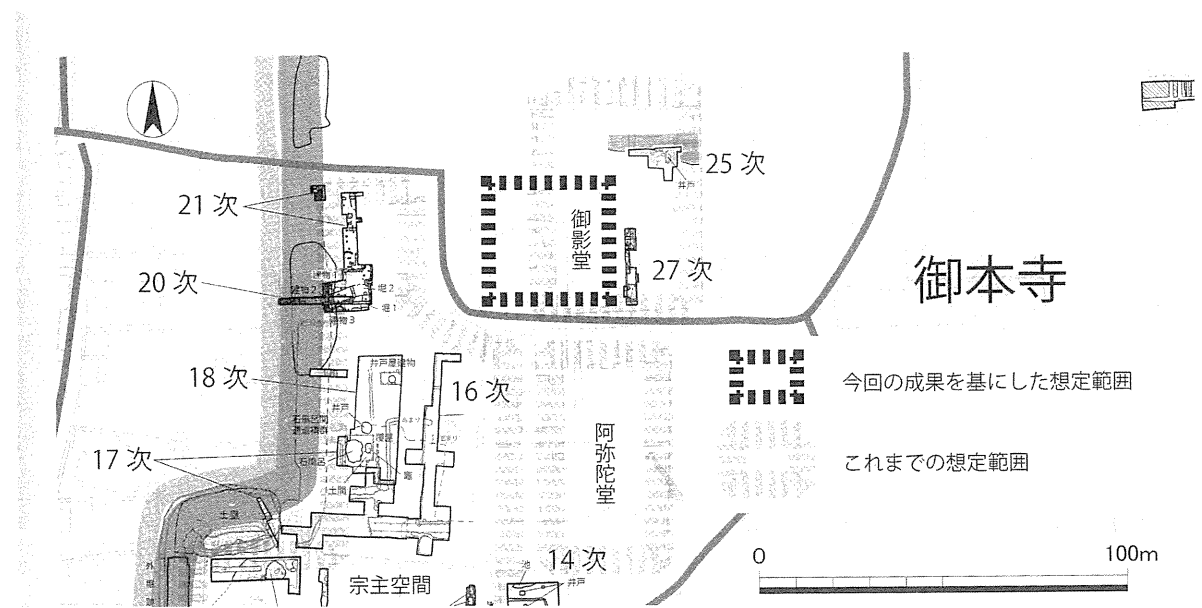


図7 最新版「御本寺」中枢施設推定図(1:2,000)  
(奥井2022より転載)

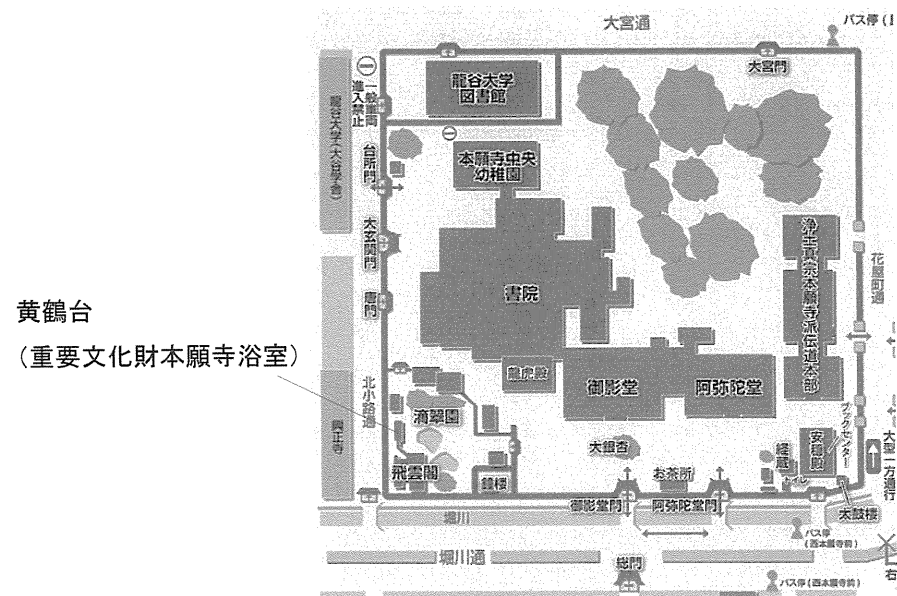
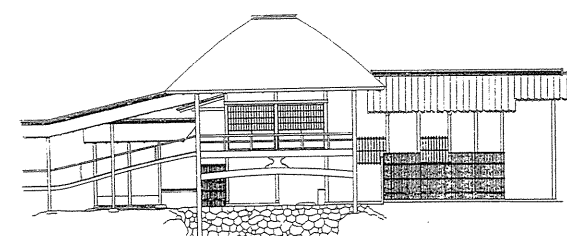
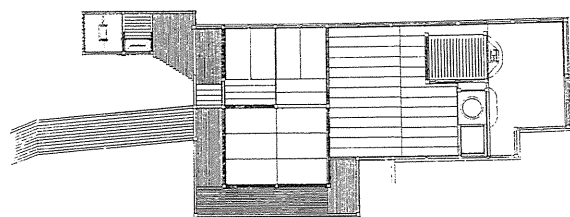


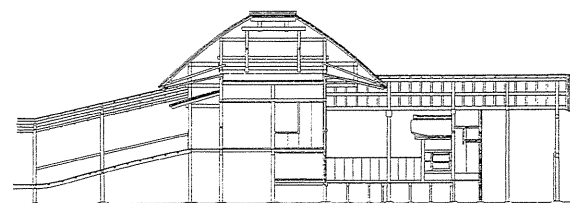
図8 西本願寺境内図と「黄鶴台」の位置  
(図は西本願寺 HP より引用)



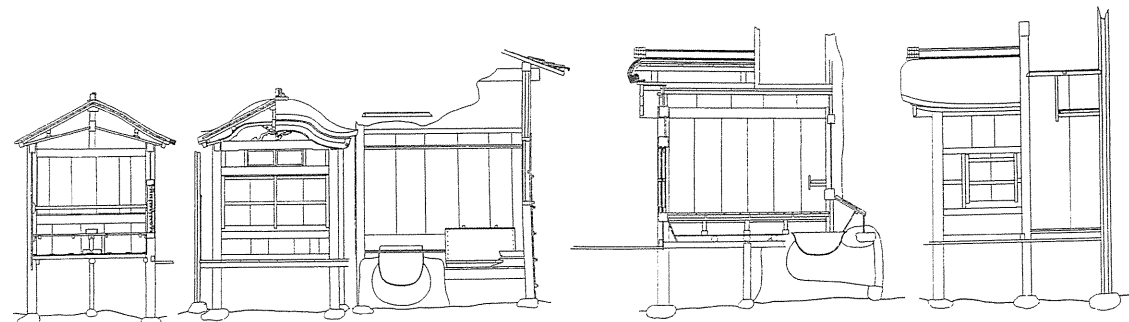
黄鶴台側面図



黄鶴台平面図



黄鶴台断面図



黄鶴台浴室詳細図

図9 「黄鶴台図」西本願寺蔵  
(『國寶書院図彙 本願寺飛雲閣 本願寺黒書院』より抜粋、一部改変)

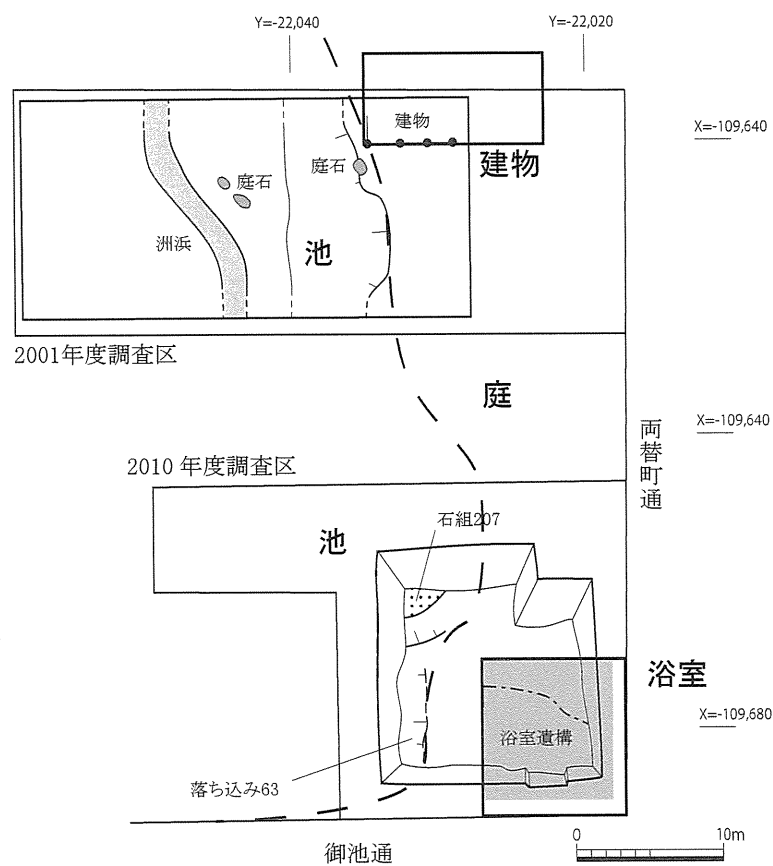
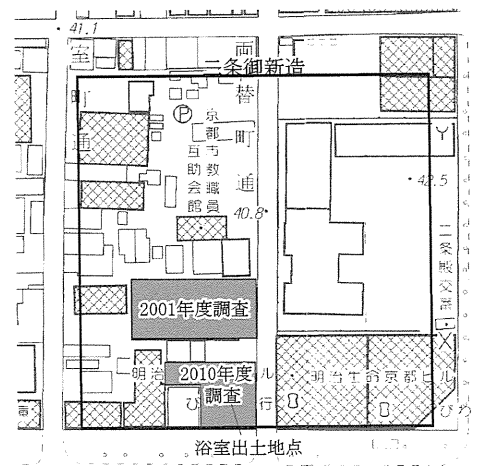


図10 二条御新造 浴室遺構と庭との関係  
(柏田 2010 より転載)



写真7 二条御新造 2001年調査 池全景 (西から)  
(山本 2002)



写真8 二条御新造 2010年調査 浴室全景 (北東から)  
(柏田 2010)

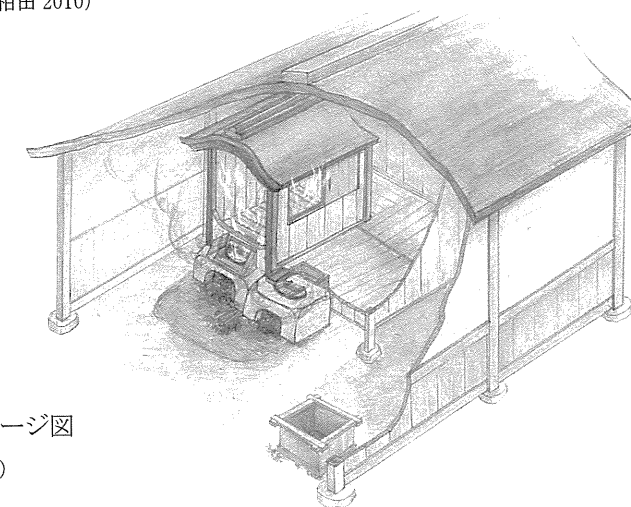


図11 信長の浴室イメージ図  
(柏田 2010 より転載)